

要注目！ 柚木麻子と原田マハ

図書館係 阿部健治

まず、先月、書き切れなかった柚木麻子のことを書こう。

彼女は若いが既に実力派作家と言うべき存在だ。本屋大賞でも『ランチのアッコちゃん』（2014 第7位）、『本屋さんのダイアナ』（2015 第4位）と2回ノミネートされている（2018 には柚月裕子という推理作家が『盤上の向日葵』という作品で第2位となった。名前が似ていて筆者は最初同じ人かと思った。この人の作品もまたいいのだ。）。また、2015 に刊行された『ナイルパーチの女子会』は第153回直木賞の候補作になり、受賞は逸したが、後にこれが第3回**高校生直木賞**を受賞するのである（「高校生直木賞」は直木賞の候補作の中から高校生の代表が自分たちとして最も面白かったのを選ぶというもの。この企画は去年で5回目で、文部科学省も後援するようになり、年々充実度を増している。毎回、直木賞本賞の作が選ばれないところが面白い。）。

さて、これらのうちで、足女生に最もオススメなのは『本屋さんのダイアナ』だ。主人公の女の子ダイアナ（なんと「大穴」と書くのだ！）と親友の彩子の「スレ違いと再会」が実にリアルに描かれている。筆者はこれを読んで、「女の子同士って難しいな（男はほんとに単純なので）。でもそれを乗り越えた女子の友情ってすてきだな。」と思った。足女生なら筆者よりずっと深く読み込めるだろう。

『ランチのアッコちゃん』は悩めるOLが懐の深い女上司に救われる話で、ほっとさせられるいい話だ。柚木ファンに言わせると彼女の作品には「白柚木」と「黒柚木」があるそうで、前者の代表がこの作品ということらしい。そして、後者の代表が『ナイルパーチの女子会』。これには圧倒された。「ナイルパーチ」は外来生物で、習性として他の生物を食い荒らし、生態系を壊さずにはいられない存在だ。主人公は美人で高学歴、本来ならモテモテのはずなのに、気がつくとも男も女も自分から離れて行ってしまふ。彼女は「自分はナイルパーチだ」と思わざるを得ないのである。そういう自分を代弁してくれるように感じたブログを見つけた彼女はその主婦ブロガーに夢中になり、ストーカーにまでなってしまう。何ともせつない展開だが、読まずにはいられない怪作だ。高校生代表たちはよくこれを選んだ（ちょっと背伸びしている感じがしないでもないのだが…）ものだと思う。いずれにしても柚木が要注目の作家であることは間違いない。

最近、読んだものの中で、特にこれは自分と相性がいいなと思ったのは原田マハ。彼女は『楽園のカンパラス』（2013 第3位）、『暗幕のゲルニカ』（2017 第6位）、『たゆたえども沈まず』（2018 第4位）と3度、本屋大賞にノミネートされている。これらはすべて「アート小説」と呼ぶべきもので、彼女のキュレーター（美術館の展覧会企画担当者）としての経験が見事に生かされており、「絵画」あるいはそれへの情熱がいかにも人間を大きく動かすかを教えてくれる。「おシャレ」だし、「大人」だし、ミステリ要素もふんだんに入っているので、最後まで

一気に読まずにはいられない、そんな作品群だ。これらが原田マハの表芸なのは間違いないが、実は筆者が足女生によりオススメしたいのは以下に記す2作だ。

一つはデビュー作の『カフーを待ちわびて』だ。第1回日本ラブストーリー大賞を受賞し、映画化もされている（未見。是非見たいのだが…）作品。沖縄・与那喜島で雑貨店を営む明青（あきお）の元に、ある日、一通の手紙が届く。漁師の父は海で亡くなり、母は彼が小学生の頃に消えてしまって明青は一人暮らし。そこに「あなたのお嫁さんにして下さい」という手紙が来て、その後まもなく本当に女性がやってくる。事情も聞けないまま、一緒に暮らし出す二人だったが…、という展開だ。どう？読みたくなったでしょ。

もう1つは『でーれーガールズ』という作品。「でーれー」とは岡山弁（他に「ぼっけー」「もんげー」というのもあるらしい）で「すごい」という意味。原田マハは父の仕事の都合で高校時代だけ岡山で過ごしたらしい。その経験を元にした作品で、1980年の女子高校生が活写されている。これを読むと「女子高校生」（の時代）というのは本当に特権的だなと思う。40年前のことだから今とは全然違うこともあるが、ああ同じだなと思うことの方が断然多い。主人公は夢見がちな漫画家志望女子高生で、（お決まりの展開だけど）親友を深く傷つけてしまって、それから…。面白さは保証します。

今期の直木賞（7月17日発表）候補作はすべて女性作家の作品で、柚木と原田も入っている。どうなるのか、結果に注目したい。

6月6日に小説家田辺聖子が亡くなった。「大阪のおばちゃん」的作家の代表で、自伝的小説『芋たこなんきん』がNHK連続テレビ小説（朝ドラ・2006下半年期）の原作となったことや古典（特に『源氏物語』）に関わる文章が多いことで知られている。しかし、筆者にとっては短編『ジョゼと虎と魚たち』の作者であるということが何より大きい。これは犬童一心監督、池脇千鶴、妻夫木聡主演で映画化されたのだが、この映画、筆者のベスト1なのだ。足の不自由な女の子（池脇）が特に取り柄もない大学生（妻夫木）と知り合い、恋仲になる。二人は本当に相性がよかったのだが、彼女には常に別れの予感があった。そして、懸念の通り別れが訪れるのだが、彼女は最後まで涙を見せなかった。その健気さ、筆者は彼女がいとおしくてたまらなくなった（池脇の演技も抜群によかった）。「恋」の素晴らしさと難しさをしみじみと感じさせる名作で、映画を見てから原作（短編ですすぐ読めてしまう）を読んだが、映画とはまた趣が違ってとてもよかった。田辺の作品の素晴らしさは、現在日本屈指の作家とも言える川上弘美が朝日新聞に寄稿して語った通り（図書館前の掲示板に貼ってある）である。1987の作品だが全く古さを感じさせない。足女生にも是非読んでほしい作品である。

3年前に本校で講演した文芸評論家加藤典洋も5月16日に亡くなっていたことが報道された。『もうすぐやってくる尊皇攘夷思想のために』という本には、本校での講演記録が載っている。そこには本校の名前がしっかり記されているが、これはすごいことだ（同様の講演を他ではしなかったわけだから）。この講演の価値を、招聘した阿見先生が述べている（やはり図書館前の掲示板）が、惜しくも講演に接し得なかった現足女生は是非、本を読んでほしい（読みやすいし、それほど長くもない）。話の肝は「メンドーさこそ人生の楽しみの根源だ」ということだと思う。どうしてそうなの、と思った人。あなたは絶対読むべきです！